

氏名（本籍） 悪原 至（神奈川県）  
学位の種類 博士（音楽）  
学位記番号 乙第6号  
学位授与年月日 令和2年3月19日  
学位授与の要件 学位規則第3条第4項  
学位論文題目 ヤニス・クセナキスの打楽器作品の分析  
打楽器作品のマクロフォームとそれらを形作る構成要素

#### 学位論文等審査委員

(総合審査)	委員長	教授	友利 修
		教授	永峰 高志
		教授	中島 大之
		教授	近藤 伸子
		准教授	沼口 隆
(演奏審査)	委員長	教授	山本 幸正
		教授	友利 修
		教授	永峰 高志
		教授	中島 大之
		教授	幸西 秀彦
(論文審査)	委員長	教授	安藤 芳広
		教授	友利 修
		教授	近藤 伸子
		准教授	沼口 隆
		教授	山本 幸正

(東邦音楽大学特任准教授、武蔵野音楽大学講師、  
沖縄県立芸術大学講師、東京都交響楽団首席奏者)

水野 みか子  
(名古屋市立大学 教授)

---

#### 審査結果の要旨

##### 審査所見

学位審査委員会は、申請者悪原至の学位審査修了リサイタルならびに学位申請論文に関して厳正な審査を行った。以下に、1. 論文審査、2. 演奏審査、3. 総合審査に関する所見を記す。

##### 1. 論文審査

提出された論文のタイトルは、「ヤニス・クセナキスの打楽器作品の分析 -- 打楽器作品のマクロフォームとそれらを形作る構成要素」である。この論文は、ヤニス・クセナキスが打楽器のみに書いた全作品、すなわち打楽器独奏曲の《Psappha》、《Rebonds》、および打楽器アンサンブル曲の《Persephassa》、《Pléiades》、《Okho》の5つの曲の分析を主題としている。クセナキスのこれらの曲の分析については、すでに少なからぬ先行研究があるが、この論文は次の2点において、独自の高い意義を持つものである。

まず第1点として、先行研究では、これらの作品を個別に扱う研究論文はあったが、全打楽

器作品を総合的に扱うものは存在しなかった。単なる概観に留まらず、個々の作品についての詳細かつ密度の高い分析によって、全体像を捉えようとする試みは高く評価される。

第2点は、先行研究の分析においては、個々の部分の作曲技法上の面、とくに作曲者が用いた数学的な手法を後付けるアプローチが主であったが、この論文においては、音楽の全体的な形式を、クセナキスの音楽の持つ強い表現力と結びつけて論じていることである。執筆者はそれを、「他の作曲家の作品には感じることのできない類のエネルギーや、構造の剛健さ」の説明が課題であるとして明言する。執筆者の分析は、数学的な部分においてだけでも独自の知見をもたらす優れたものであるが、それを踏まえながら、さらにその先に進み、演奏家として自らが持っている美学的な解釈との接続を試みていることは、演奏家による博士論文の理想的なあり方を示している。

執筆者は、全10章、341頁、付録を入れて348頁からなる大部の論文において、それらの課題を成し遂げている。

しかしながら、第2の点において、いくつかの弱点が認められることも指摘された。作品の全体構造を捉えるのに、論文では、「マクロフォーム」という概念を導入し分析を行なっているが、「マクロフォーム」の概念について、簡単な定義は成されているものの、論文全体の中での用法において、この概念の建築的空間性、音楽の流れにおける時間性の側面の関係をはじめ、その美学的な意味についての総合的な考察は手薄となっている。この概念が、クセナキスの作品の分析に特にあてはまるのか、他の作曲家の作品についての従来の形式分析とどのように違うのかという疑問は必ずしも払拭されていない。そのことと関連して、クセナキスの打楽器作品が、音楽史の流れの中で、同時代の作曲家の作品に対してどう位置づけられるのかについても、研究の前提部分の記述において言及が不十分であることは惜まれる。

とはいえ、これらの批判は、この論文が極めて高い水準を持ち、独創的なものであるとの評価をゆるがすものではない。いかなる疑問もなく、学位論文として相応しいものである。

## 2. 演奏審査

演奏審査においては、論文に扱われた5作品のうちから3曲、打楽器アンサンブルの作品の《Okho》および、独奏作品の《Rebonds》と《Psappha》に加え、オーボエと打楽器奏者のための二重奏曲である《Dmaathen》が演奏された。後者の二重奏曲の選択も加え、プログラム構成、そして全曲の解釈において、確固たる意思のもとにリサイタルが組み立てられていることがまず高く評価される。どの曲を通して、高い演奏技能がそこに発揮されただけでなく、注意深くアンサンブルを組み立てる能力も示された。が、全曲において、まんべんなく、透明感のある美しい音色による演奏が行なわれた一方で、その裏返しとして、1曲1曲がもつ個性への差異化が必ずしも十分ではないこと、透明感や軽やかさとは違う、-演奏審査委員の一人の表現を借りれば-音楽の「沈み」や「えぐさ」をも含めた色合いの表現、つきつめれば、論文においてまさに申請者がクセナキスの作品の魅力として強調していた「ディオニュソス的」な側面に関する部分への配慮が必ずしも十分でないことは今後の演奏家としての課題となろう。とはいえ、演奏全体は、博士の学位の請求にあたって望み得るものとして、最高度の水準を持つものである。

## 3. 総合的判定

論文審査、演奏審査ともに上記のように高い評価が下された。これに加え、申請者が在籍中に発表した個別の論文、演奏活動、また教育的な貢献を総合的に判断し、申請者に「博士（音

楽)」の学位を授与することが相応しいと判定する。